大塚和との邂逅 (7)　大塚和企画作品レヴュー (1)

「密会」（1959年 日活）監督 中平康　原作 吉村昭　脚本 中平康　撮影 山崎善弘　美術 松山崇　音楽 黛敏郎　助監督 西村昭五郎　出演　桂木洋子　井上孝雄　宮口精二　細川ちか子

黒澤明が東宝での労働争議のために活動の場を他の映画会社に移した時期がありましたが、松竹で「醜聞」（1950）「白痴」（1951）の二本を撮っています。この二本の助監督に付いたのが中平康でした。（因みに「白痴」のチーフ助監は野村芳太郎）「醜聞」の準主演女優が桂木洋子で、薄幸の少女を演じ強い印象を残しています。それから9年が経ち、桂木洋子はこの作品の主演女優としてこれもまた強い印象を与えます。

三島由紀夫が1957年に「美徳のよろめき」を発表し、当時ベストセラーになり女性の不貞、浮気を指す「よろめき」が流行語となり、「よろめき夫人」「よろめきドラマ」といった語が生まれます。そういった世相だったのです。この作品でも、桂木陽子演じる大学教授夫人が、夫の教え子である東大法科の学生に「よろめき」、不倫関係になります。夫婦の間には歳の差が大きいせいか、子どもはいません。幾度も逢瀬を重ねるうち、神社の裏手の茂みの中で睦まじく時を過ごしていると、ごく近くでタクシー強盗が起き運転手が殺害されてしまいます。二人はこれを息を潜めて目撃してしまいます。後ろめたい二人は、このことを警察に知らせずお互いの身の安全を考え、何も無かったことにしようとします。

冒頭、二人が神社の裏手の茂みの中でのラヴシーンが映し出され、二人の関係、置かれた状況が二人の会話で判ってくるのですが、中平康はこのシーンをワンカットの長回しで描きます。大変長いカットです。7分21秒にも及ぶ長回しです。二人の逢瀬の幸福な時間が濃密に描かれます。実に見事な描写は見る者を十分に引きつけます。そして、タクシー強盗が起きてからは、リズムが一変し二人の心理描写は緊張感と切迫感で支配されます。資産家の大学教授夫人の地位からどうしても離れたくないという桂木洋子と殺害された運転手の遺された遺族の家庭環境を知り、どうしても警察に知らせるべきだと思い悩む純粋培養された、しかも東大法科の学生の伊藤孝雄との葛藤劇が緻密に展開され大きな見どころになります。そして、冷徹なまでのリアリズムに満ちた結末を迎えます。71分という極めて短い上映時間の中で、ドラマ性の凝縮したこの作品は、中平康の演出能力の高さもさることながら、脚本の完成度の高さに唸らせられる思いがします。一級のサスペンス作品として、より高い評価を受けて然るべきなのですが、現実は実に悲しいものです。

上映早々の日活マークを見なければ、日活の作品とは思えない作品であり、裕次郎もルリ子も出てくる訳ではなく、アクションの青春の輝きもない作品です。極めて日活色の薄い、しかし作り手の強い意志と熱を感じる大塚和らしい一作です。主演の桂木洋子（1930～2007）は松竹歌劇団の出身、松竹の女優として活動、1953年に作曲家の黛敏郎と結婚し、1963年の日活作品出演を最後に引退。伊藤孝雄（1937～　）は、1955年に宝塚映画（東宝系）でデヴュウ、本作は2本目での抜擢です。1960年に俳優座養成所入所の後、1963年に劇団民藝に入団し現在でも活動。筆者にとっては、山下耕作監督「戒厳令の夜」（1980年東宝作品 五木寛之原作）の主演が印象深い俳優です。

因みに、「密会」の公開は、1958年5月20日。当時の日活の新作封切は二本同時に公開するのではなく一本づつ公開し二本立て体制を維持していたと思しく（他社でも同様であったようですが）、11月3日に井田探「可愛い花」（岡田真澄、白木マリ主演）、11月15日からは斉藤武市「波止場の無法者」（小林旭、浅丘ルリ子主演、助監が神代辰巳）でした。他社では、11月17日に大映で小津安二郎「浮草」が公開され、同日松竹では大島渚のデヴュウ作「愛と希望の街」が、11月20日からは小林正樹「人間の條件 第三、四部」が公開されています。そういう時代だったのです。